

佐渡学センターだより

佐渡学センター
(佐渡市教育委員会社会教育課)
2013年3月15日(金)
第8号

調査研究の成果と活用

学芸専門員 北見 継仁

佐渡学センターの業務には、「収集」「保存」「調査研究」「教育」「普及」「展示」等があります。

なかでも「調査研究」については、往々にして短期集中型で行い、それなりの成果を事業に反映してきました。しかし、佐渡学センターとしての調査研究をより充実したものにするためには、計画的、継続的に取り組まなければならないと思っています。そしてまた、多くの人がその成果を活用できるようにしたいと考えています。

さて、私は以前に『金井を創った百人』という本の出版にかかわったことがあります。その際に、金井出身ではありませんが、明治40年に佐渡に赴任してきた深井康邦郡長をこの「百人」にいれてはどうかと考えました。『金井町史 近代篇』に、「彼は農業の振興に非常な熱意を示し、八方に奔走して有志の拠金を募り、明治四十三年八月、歴史的にゆかりのある中興城趾に郡農会堂を建設して、郡農会事務所と農事公会堂とした。そして佐渡全島の農業センターとしたばかりではなく、『全郡のあらゆる会合はここで行え』と広くこの会堂を開放した。彼は相川の郡役所に在庁する日数よりも、金沢に留まって農政万般について采配することが多かったので、『金沢郡長』の異名をとったといわれている」と述べられていたからです。

ところが、いろいろと資料にあたったのですが、生

没年もわからず、詳しい業績や顔写真もなかなか見つけられず、「百人」に入れることはあきらめました。それでも富山県出身であることがわかりました。そこで私は、平成17年に「越中郷土史の会」に問い合わせの依頼を送付しました。それから6年後の平成23年に、何と深井氏のお孫さんから返事が届きました。そこには、

深井康邦の孫(三男の次男74歳)。祖父の佐渡での記録を探していましたら、本件を見つけました。生・没年は次の通りです。1868-12-8生、1947-2-14没、出身は富山県滑川市赤濱です。(以下略)

と書かれていました。

その後追跡調査を行ったところ、深井郡長は、佐渡の産業技術の発展に著しく貢献したばかりでなく、『佐渡国誌』の編纂を郡の事業として行ったり、大正初年まで佐渡の小学校の教員が佐渡出身者のみであったのを、越後からも入って来るようにしています。深井が佐渡から転任後に発行された「新佐渡」(新聞)は、「積極主義発展主義膨張主義進退主義で佐渡に臨まれた」と彼を評しています。

初期の目的が達成されるまで、かなり時間がかかりましたが、調査研究の継続が思いがけない成果をもたらした出来事でした。

＝ 山で見られるノッチ ＝

佐渡の海岸には、波の浸食作用によって出来た窪み、^{はしよくぼ}波食窪(ノッチ)が所々で見られます。実は、山にもノッチがあるのをご存じでしょうか。

ドンデン池からタダラ峰周辺にはすばらしいシバ草原が広がっています。裸地とシバ草原の境に左の写真の黒く見える部分のように、えぐられた小さな崖(段差)が随所に見られます。特に外海府側(北西側)が顕著です。この小さな窪んだ崖を風食ノッチといい、強風の吹く高山などに見られる現象です。大



写真だより

佐渡山地は低い山ですが、強い季節風は、高山並みの地形や植物群を生み出しています。風食ノッチは、強い風によってシバの根元の土がえぐられてできたのです。これが進むとシバ草原は裸地に変わっていきます。でも、一部ではありますが、裸地だった場所に新たにシバが生えだした場所もあり、生命力の強さを感じます。ドンデン山や大佐渡を探索する時、風食ノッチを探してみませんか。(池田雄彦)



相川技能伝承展示館 (相川)

佐渡には多くの伝統工芸・技術があり、相川技能伝承展示館はその中でも盛んな陶芸(無名異焼)・裂織り(ネマリバタ)の技術を実際に自分で体験できる施設です。

佐渡には現在でも多くの窯元があり、佐渡出身の陶芸家には故三浦小平二氏や伊藤赤水氏のように人間国宝に認定された方もいます。

相川技能伝承館の陶芸体験では、金山から産出される赤い粘土で作られた無名異焼の制作体験ができます。北沢窯のベテラン陶芸家が親切丁寧に指導にあたり、1時間程度でロクロ作り、手作りのほかに完成している湯飲みなどに字や絵を刻む体験ができます。粘土を乾燥させてから成形・焼成するので、作品が体験者の手元に届くには約1ヶ月かかりますが、毎年多くの方が体験しています。

裂織りは、佐渡の海府地域に伝承されてきたもので、相川技能伝承展示館ではネマリバタ(地機)での体験が



できます。指導員が付くものの、慣れるまで時間がかかり、簡単ではありませんが、2時間程度でコースターやテーブルセンターなどを織ることができます。

佐渡に昔から伝わる伝統技術を気軽に体験できますので、みなさまのお越しをお待ちしております。

(山口忠明)

資料報告

「ウチオケ」と前浜地域の揚浜式製塩

平成23年7月発行の『佐渡学センターだより』第4号で、揚浜式製塩について紹介しました。国指定重要有形民俗文化財『北佐渡の漁撈用具』(2,162点)の中で、製塩用具が62点含まれており、大部分は両津湾地域の河崎浜と羽吉浜で使われていたものです。その中、前浜(小佐渡の越後に面した海岸部)の^{あわび}匏地区で海水の散布に使用されていた「ウチオケ」が3点あります。この地域での揚浜式製塩は、『両津市誌』等の郷土資料にも記載されておらず、一般には知られていません。

3つのウチオケはいずれもスギ材で、口径は約20cm、高さ約45cmあり、両津湾地域で使われていたものと同じタイプです。3点とも資料の由来が明確になっており、明治14(1881)年~明治23(1890)年にかけて、近隣の野浦で作られ、匏村の惣左衛門(2点)と仲村孫重郎(1点)が持ち主である旨が墨書で記されています。本間惣左衛門家は江戸時代の前半期に匏村の名主役を^{おおや}代々務めてきた中世以来の大家です。明治11(1878)年に記された匏村の『生産物書上帳』には塩が記載されていないことから、このウチオケが作られた頃に始められた製塩業であったことが想定されます。惣左衛門家では明治の初めから酒造りを行っていますが、明治17(1884)年頃に木材や農水産物、生活用品の販売

に転換を図っています。ウチオケを使っていたのがこの頃になります。

この他、明治の終わり頃に野浦で使われていたとい

うウチオケが1点あります。塩が専売制に切り替わり、佐渡の揚浜式製塩が終わりを迎える時代に作られたものです。

このように、明治時代の一時期に前浜地域でも揚浜式製塩が行われていたことが、これらの文化財から読み取れます。

ところで、砂浜を利用した揚浜式製塩は、両津湾側だけではなく、かつて真野湾でも行われていました。江戸時代中期の佐渡を記した『佐渡四民風俗』には四日町・真野新町での焼塩のことが記されていますが、今に伝わる関係資料が少なく、真野湾地域の製塩史の解明は今後の課題として残されています。(野口敏樹)



ウチオケ(本間惣左衛門旧蔵)

佐渡学の散歩道 「北沢の選鉱製錬施設群 その2」

1. 相川に残る近代鉱山跡

相川地区には佐渡鉱山近代化に伴う施設群が残り、鉱石の採掘→破碎→選鉱・製錬→島外への積出しまでの一連の流れを知ることができます。

これらの施設跡は、平成22年2月より国史跡「佐渡金銀山遺跡」に追加指定されています。

佐渡学センターだより第7号で、相川の北沢地区に残る選鉱・製錬施設を紹介しましたが、紙面の関係で触れることができなかった設備群について紹介します。

2. 北沢地区に残る施設跡

○北沢火力発電所発電機室棟

北沢浮遊選鉱場の西側(海側)にある赤レンガ積みみの建物です。明治41年(1908)に建設されました。現在は明治から昭和期の古写真の展示スペースになっています。



○50mシクナー

濁川右岸側にあります。鉄筋コンクリートでできた直径約50mの円形建造物です。

北沢浮遊選鉱場と一連のものとして昭和15年(1940)に完成しました。主に選鉱・製錬する前段階や選鉱後



に、水分を除去する工程を担いました。

○工作工場群跡

選鉱・製錬施設で用いる部品や機器を修理・補給する作業場として昭和14年(1939)頃までに整備されました。平成19～20年度にかけて発掘調査が行われ、現在は発掘された建物基礎の位置を見ることができる公園になっています。



○旧御料局佐渡支庁跡

濁川の右岸側、北沢地区の入り口にあります。明治22年(1889)に佐渡鉱山が大蔵省から御料局に移管されたことにより、御料局佐渡支庁として建てられました。三菱合資会社に払い下げられた後も鉱山事務所として使われ、昭和31年(1956)からは相川郷土博物館になっています。江戸時代～近代までの鉱山関係の資料が展示され、工作工場で作成された機器部品の木型も見学できます。



現在、北沢地区は一部が史跡公園として整備され、イベント等に活用されています。また、地区内にある相川技能伝承展示館は体験学習施設(裂織り体験・無名異焼陶芸体験)として多くの利用があります。

訪れる人々は斜面に残る巨大な構造物に目をみはります。江戸時代のイメージが強い佐渡金銀山にあって、近代鉱山の存在をアピールする記念物です。

(滝川邦彦)

「サドガエル」 「佐渡学」話題提供者 加茂小学校5年1組 高橋雅子

わたしたち加茂小学校5年生は、総合学習で、「佐渡の自然環境」について学習しています。その学習を進める中で、15年前に佐渡で発見され、昨年12月に新種として認定された「サドガエル」に出会いました。

サドガエルについて、自分で調べたり、出前講義で話を聞いたりして、サドガエルは、一年を通して水がある場所で生息していることや、サドガエルやトキなどの生き物が生息できる佐渡の環境を守っていくことの大切さを学びました。

わたしは、この学習で学んだことを、佐渡に住んで

いる人々に伝えたいと思いました。そうすれば、自然を大切にしようとする人がもっと増え、環境問題もなくなり、生き物も私たちが平和にらせる佐渡になると思います。



サドガエルを観察しているお友だち

掲示板

佐渡植物園「雪割草展」開催のご案内

来る3月23日(土)～24日(日)の2日間、佐渡植物園主催の「雪割草展」をウッドパレス妹背(佐渡市羽茂本郷3686-1)にて開催いたします。

今回は、雪割草を中心に初春の山野草が数多く出展される予定です。また、雪割草などの愛好家の方々からの出展を、会場のウッドパレス妹背で23日(土)8時30分～9時まで受付けておりますので、ぜひともご出展ください。大勢の方のご来場を、心よりお待ちしております。(須藤洋行)



地域学習双書発刊のお知らせ

佐藤利夫著『佐渡歳時記』(地域学習双書Ⅷ)

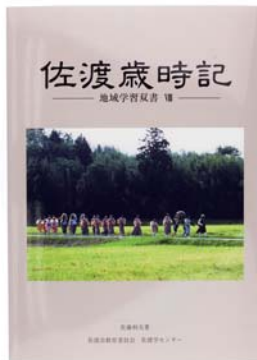
佐渡学センター発行

両津地区公民館「佐渡入門」講座の成果として、佐渡の年中行事や祭礼をまとめた1冊。両津郷土博物館で頒布しています。

B5判 133ページ

価格@ 2,000円(消費税込)

問合せ先 佐渡学センター
(両津郷土博物館内)
0259-23-2100



新情報

明治記念堂(開導館)のロシア関係資料

千種にある明治記念堂は、明治35(1901)年に建てられた日清戦争から第2次世界大戦に至る戦没者慰霊施設です。日本海海戦で佐渡に遺体が漂着したロシア水兵の墓が境内にあります。記念堂に併設されている開導館には、戦争関連を中心とした資料が展示されており、ロシア兵に関する資料も含まれています。

これに注目された新潟ロシア連邦総領事館総領事代理のセルゲエフ・ミハイル氏が平成24年11月29日に来島され、記念堂と開導館を視察されました。これらの資料の大部分は帝政ロシア時代の陸軍のものであり、わかりました。

(野口敏樹)



展示されている肩章群

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇ 新寄贈資料紹介 ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

大正末期の佐渡観光資料3点を、東京都の戸島様から寄贈いただきました。

当時の佐渡旅行案内地図、老舗として賑わった野村旅館(両津夷:昭和3年の夷大火まで現北越銀行の場所にあった)のパンフレット、絵ハガキ10枚です。名勝旧跡や旅館、越佐航路の所要時間など、観光地として賑わいを見せ始めた頃を知る貴重な資料です。

編集後記

近年にないほど厳しい寒気も遠ざかり、やっと春の兆しを感じられる頃になりました。日ごとに雪も消え、山野草が咲き乱れるのが楽しみとなってきました。1月始めより2ヶ月間、佐渡博物館と共催で開催しました「佐渡市所蔵お宝展」には、多くの方々に来館していただきました。「第2段もやってほしい!」とうれしい声も聞かれました。来館者の多くが中高年の方で、若い人の来館が少ないのがちょっと心残りです。各種のシンポジウムやセミナーも、同様に中高年が大半です。歴史・文化・自然の島「佐渡」のすばらしさを若者にどう知ってもらうか、どう伝えるかについて、佐渡学センターで工夫する必要性を感じております。(池田雄彦)

発行 佐渡学センター(佐渡市教育委員会 社会教育課)

〒952-0021 新潟県佐渡市秋津1596 両津郷土博物館内 電話 (0259) 23-2100 FAX (0259) 23-4820

ホームページ <http://www.city.sado.niigata.jp/sadobunka/denbun/>